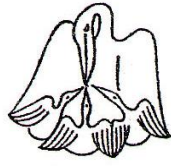


阿佐ヶ谷教会



信友会会報

9月例会（9月27日開催）報告



使徒言行録の学び（第23回） 棚村 恵子 先生
—新約聖書 使徒言行録 第23章—

『聖霊行伝をたどる—使徒言行録の学び—第23章』

棚村 恵子 先生

～生きるも主のため、死ぬも主のため～

第23章でのパウロは年齢60代の還暦位で、いよいよ人生の最後の時に向かってローマに向かうこととなります。パウロは、若い時期はファリサイ派に属し、キリスト者の弾圧に走り、第9章に書かれていますようにダマスコ途上で復活のキリストの顕現による回心、そして異邦人伝道のための3回にわたるアジア、ギリシャへの伝道旅行を行い、数々の災難、出会いと別れ、不本意な同胞との対立を経て最後の旅に向かいます。パウロの予定では、窮乏しているエルサレム教会に援助金を持参した後、ローマ経由でイスパニアへ行き主の福音を述べ伝える予定でした。しかしエルサレムで投獄され、囚人としてローマへ護送されることとなります。

パウロの人生を振り返ると、ダマスコでのキリストの顕現により価値観が180度転換します。フィリピの信徒への手紙3章5節～11節には、出自においてファリサイ派の中の優等生であった自分が、キリストを知ることのあまりのすばらしさに、今では他の一切を損失と見ていると告白しています。迫害者から信仰者へ、殉教者へ、という展開はパウロにとって思ってもみなかったことでした。私たちも振り返ると人生は計画通りには行かないという経験が沢山思い浮かぶのではないのでしょうか。

最高法院での弁明

第23章の構造は、23章11節まではパウロ最高法院での弁明、12節から22節までは、エルサレムのユダヤ人たちのパウロ殺害計画。23節から26章2節までが、カイサリアへの護送とそこでの証しという構成です。

パウロの有罪の理由を知りたいと考えた千人隊長クラウディウス・リシアは祭司長たちに命じて最高法院を招集させ、パウロを出廷させます。ここからパウロは、自分が良心に従って神の前で生



きたことを告げると、大祭司アナニアがパウロの口を打つよう命じます。3節でパウロはアナニアに向かって「白く塗った壁よ、神があなたをお打ちになる。あなたは律法に従って私を裁くために座っているながら、律法に背いてわたしを打てという」と言います。これは、エゼキエル書13章10節にある、「平和がないのに、彼らが『平和だ』と言ってわたしの民を惑わすのは、壁を築くときに漆喰を上塗りするようなものだ。漆喰を上塗りする者に言いなさい。『それは容易に剥がれ落ちる。』」とエゼキエルが偽預言者に言った言葉の引用です。また、5節で、パウロは、出エジプト記22章27節の「神をののしってはならない、あなたの民の中の代表者を呪ってはならない」を引用しています。

6節から、パウロは最高法院の多くがファリサイ派とサドカイ派で構成されていることを知り、自分がファリサイ派のユダヤ人であり、死者が復活することに望みを抱いていることで裁判にかけられていると言います。この弁明を聞いてファリサイ派とサドカイ派の間で論争が起こり最高法院は分裂しました。死者の復活については、モーセ五書にはなく、ダニエル書12章2-3節に、「多くの者が地の塵の中の眠りから目覚める。ある者は永遠の生命に入り、ある者は永久に続く恥と憎悪の的となる。目覚めた人々は大空の光のように輝き、多くの者の救いとなった人々はとこしえに星と輝く。」という箇所がある程度で、全体的には旧約にはほとんど復活については述べられておりません。

サドカイ派は死人の復活、天使、霊を否定し、ファリサイ派は復活や天使、霊を肯定しますが、パウロは、この違いを利用して自分が正当なファリサイ派だと主張します。ここでは両派を分裂させるパウロの巧みな戦術が発揮されます。

9節でファリサイ派の律法学者はパウロの擁護に回り、「この人には何の悪い点を見いだせない。霊か天使かが彼に話しかけたのだろうか」と言います。両派の論争が激しくなったので、千人隊長はパウロの身の危険を案じて兵営に連れ帰ります。パウロは、自分がローマの市民権を持つことやファリサイ派であった立場を利用して、ローマの千人隊長やファリサイ派の学者を味方につけて、囚人でありながら最高法院の尋問を主導したのです。

兵営でのイエスの顕現

11節では、その夜に主がパウロの傍らに立って、「勇気を出せ。エルサレムでわたしのことを力強く証したように、ローマでも証しをしなければならない」と励まされました。パウロの当初の計画では、イスパニアに行く遠大な伝道計画でありました。パウロ自身、ローマ人への手紙第15章22節からで、「わたしは、イスパニアへ行く途中にローマにしばらく留まり、皆さんと喜びを味わいたい」と書いて



います。しかし、それは挫折し、神のご計画により、囚人としてローマに護送されることになったのです。自分の人生設計ではなく、主のご計画にパウロは従います。生きるも主のため、死ぬも主のためです。

使徒言行録におけるパウロの伝道については、危機的な時に主イエスの幻による主導があります。第18章9節では、コリントでのユダヤ人の反抗を受けていたとき、ある夜に主イエスがパウロに「恐れるな。語り続けよ。黙っているな。わたしがあなたと共にいる。」と励ましています。第16章7節からの第2回の小アジアの伝道旅行の途上のトロアスでは、神の霊がマケドニア人を立たせ、「マケドニア州に渡って私たちを助けてください、」と願ったため、パウロたちはマケドニア、ギリシャへの伝道に向かうことになりました。パウロたちの伝道計画が神の宣教計画へと大きく舵を切った切っ掛けとなったのです。

総督フェリックスのもとへの護送(パウロのローマへの護送の始まり)

12節から、ユダヤ人たちのパウロ暗殺の陰謀が書かれています。40人ほどのユダヤ人がパウロを殺すまでは食事を断つことを誓います。そしてもう少しパウロを取り調べることを口実に、パウロを最高法院に連れてくる途中で暗殺することを計画します。しかし、その情報をパウロの姉妹の息子が聞きつけパウロに報告し、百人隊長とその甥が千人隊長の耳に入れます。なお、パウロに既婚の姉(妹)がおり、その子がエルサレムに住んでいたことは聖書ではこの箇所だけに記載されているだけです。

千人隊長クラウディウス・リシアは、パウロをその夜のうちに総督フェリックスが住むカイサリアに護送することを決めます。彼はパウロの護送にあたって次のような手紙を添えています。「パウロがユダヤ人たちに捕らえられて殺されそうになっていたのを助け出した。彼がローマの市民権を持っていたためである。彼の罪状を最高法院で審議したが、その罪状はユダヤ人の律法に関する問題で、死刑や投獄に値する理由ではないことが判明した。しかしユダヤ人たちにこの者に対する殺害の陰謀が執拗にあるので、直ちに閣下の元に護送する。告発人たちにはこの者の件を閣下に訴え出るように命じる。」そして、二人の百人隊長に命じて衛兵470人を護衛につけるように命令しました。パウロは馬に乗せられその夜のうちにアンティパトリスまで送られ一夜を過ごし翌日カイサリアに護送されました。



第23章のまとめ

第23章を総括すると、ここからパウロの人生の最終章として、ローマへの護送が始まります。これはパウロの当初の計画ではなく復活の主のご計画です。これによって、パウロはあらゆる機会を宣教のチャンスにしています。私たちはパウロのように劇的ではなくとも、自分の計画通りでない病気、失望、喪失など思いがけない出来事や不本意な道などの経験があるのではないのでしょうか。しかし、それらはキリスト者にとっては挫折ではなく、悲劇でも不運でもありません。全てが主のため、復活の主のご計画であると考えられないのでしょうか。生きるも死ぬも主に下駄を預けた身であると考えれば余計な心配や気張りがなくなります。「勇気を出しなさい」、「共にいる」と言っておられる主に自分を預けると、心に余裕が生まれ、豊かな信仰生活を送れるのではないのでしょうか。(文責：玉澤武之)